

日本の炭鉱遺産の活用状況と山口県の課題について

準会員 ○伊藤友梨 1*
正会員 岡松道雄 2**
正会員 宋 俊煥 3***

炭鉱 遺産 炭鉱遺産
遺産の活用

1 はじめに

1.1 研究の背景と目的

日本には、かつて多数の炭鉱が存在し、石炭産業が繁栄していた。しかし、1960年代以降エネルギー革命によって石炭産業は急速に崩壊し、現在日本で稼働している炭鉱は、釧路コールマインの1つのみとなった。石炭産業は廃れてしまったが、炭鉱遺産(以下、遺産)は全国各地に残っている。遺産も保存されているものはわずかで、その多くが消滅の危機にある¹⁾。

遺産を保存・活用し、旧産炭地域を再生する事は、日本の近代化に大きな役割を果たし、人々の暮らしを支えてきた炭鉱の歴史、世界有数の採炭技術、職人の誇りや力、過去の叢智を後世に伝達し、これからの未来を創造するために重要なまちづくりの手法の1つと考える。

本研究では、日本全国の遺産の保存と活用、それによる旧産炭地域の再生事例を時代ごとに整理し、日本の遺産の現況を分析するとともに山口県の遺産活用の課題について考察することを目的とする。

1.2 研究の方法

まず、日本全国の炭鉱があった場所と変遷について調べ、各炭鉱の遺産の現況を表にした。次に、表の結果を時代ごとに地図上に表した。最後に、山口県の遺産の活用状況について調べ、遺産の中でも活用率の高い三池炭田と比較し、山口県の遺産の活用方法について考察した。

2 日本の炭鉱遺産の概要

2.1 主な炭田の位置

図1に日本の主な炭田の位置を示す。国内には北海道、福島、山口、九州を中心に炭鉱跡地が存在し、沖縄にも存在した。

2.2 炭田の変遷

図2に日本の石炭生産量・輸入量の変遷を示す。江戸時代後期から石炭の生産が始まり、昭和初期にかけて生産量は増加し続ける。第二次世界大以降、日本の石炭産業はエネルギー革命により崩壊していく。図2より、その過程は5つに分類できる。表1にその時代区分を現す。

3 各炭鉱の保存・活用状況

3.1 分類

図1に示した全国の炭田について一覧表を作成した。そ

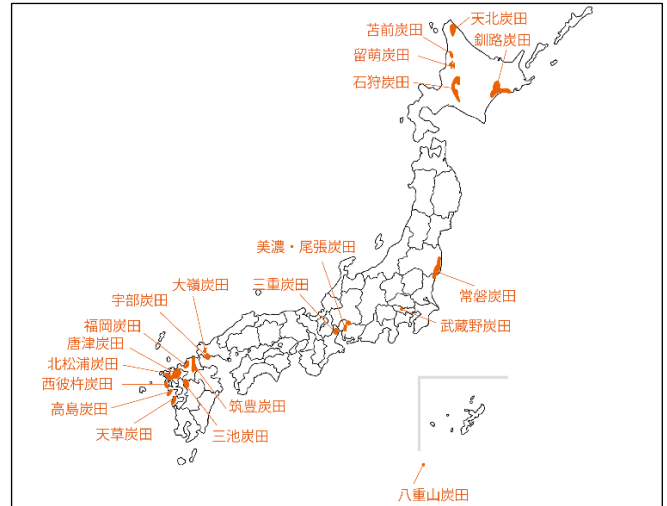


図1 日本の主な炭田¹⁾

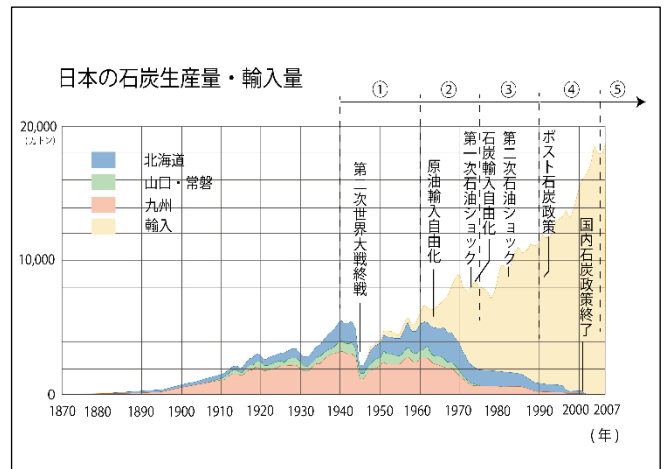


図2 日本の石炭生産量・輸入量²⁾

表1 時代区分

時代区分	年	時代
①	1940~1960	第二次世界大戦の終戦により、石炭需要が一時的に下がるが、再び需要が高まっていく
②	1961~1975	エネルギー革命が起こる
③	1976~1990	石炭産業が最終的崩壊局面を迎える
④	1991~2005	国内での本格的な採炭(坑内掘り)が終了する
⑤	2006~2022	国内の石炭産業が終わり、閉山後の炭鉱遺産の価値が見直されていく

の中から表2、表3にそれぞれ山口県の宇部炭田・大嶺炭田と、福岡県と熊本県にまたがる三池炭田の遺産の概要を抜粋した。各表で遺産となった施設が造られた年を時

代ごとに色分けし、1940年から1960年を緑、1961年から1975年を青、1976年から1990年を黄色、1991年から2005年を水色、2006年から2022年を紫とした。また、遺産が、現在消滅・放置されているもの、保存・活用されているもの、重要文化財、登録有形文化財、史跡名勝天然記念物、世界遺産などに登録されているもの、閉山後に新しく建設されたもの、に分類した。

図3には、それぞれ分類した時代ごとに、開坑や、鉄道の開通、堅坑櫓の建設など、炭鉱の始まりを橙、炭鉱の閉山や、休坑、保坑を緑色、炭鉱の遺構で放置・消滅しているものを水色、遺構で保存・活用されているものを薄い青、遺構が保存されそれが登録されているものを濃い青、炭鉱閉山後、新しく建設されたものを紫として色

分けをし、書き込んだ。

ここでは山口県の宇部炭田・大嶺炭田と三池炭田の遺産と、1960年から1975年の地図を載せたが、同じように全国の遺産について、地域・年代を分類した。

3.2 山口と三池の比較

表2および表3より三池炭田の遺産は保存活用されているものが多く、ほとんどの遺産が登録され、世界遺産の指定も多い。一方で、山口県では、三池炭田に比べると、放置されている遺産が多い。特に大嶺炭田ではほとんどの遺産が活用されていないことが分かる。

3.3 1961年から1975年の日本の炭鉱の状況

図3より、1960年から1975年は、多くの地域で炭鉱が閉山し、炭鉱の時代が終焉に向かっていていることが分かる。

表2 山口の炭鉱遺産の分類³⁾⁴⁾¹⁰⁾

所在地(県)	炭田名	炭鉱名	遺産名称	開業年	消滅(放置)	保存・活用	登録					新しく建設	
							重要文化財	登録有形文化財	史跡名勝天然記念物	世界遺産	近代化産業遺産		
山口県	宇部炭田		石炭記念館	1969年		○						○	○
			宇部市渡辺翁記念会館	1937年建設		○	○2005.12.27					○	
			日本国有鉄道D51-18号蒸気機関車	1936年		○						○	
			桃山配水池量水室(沖ノ山上水道施設)			○			○			○	
			旧桃山一号配水池監視廊入口	1924年建設		○			○1997.11.05			○	
			西沖ノ山鉱本坑棧橋		○								
			沖ノ山電車堅坑石垣	1925年建設		○			○1997.11.05				
			沖ノ山電車堅坑	1957年		○							
			東見初炭鉱	宇部鉱業所二坑変電所跡		○							
	長生炭鉱	通気堅坑跡(ピーヤ)		○						○			
	本山炭鉱	本山鉱坑口跡			○		○						
	雀田炭鉱	斜坑坑口			○								
	大嶺炭田	長門無煙炭鉱→山陽炭田	美祢斜坑坑口と原炭庫				○						
			桃ノ木露天掘跡			○							
			美祢斜坑材料坑道の化粧柱			○							
			選炭工場跡			○							
			表川変電所跡			○							
			大嶺無煙炭鉱	JR大嶺駅プラットホーム			○						
大明炭鉱			大明炭鉱選炭場跡			○							

表3 三池炭田の炭鉱遺産の分類³⁾⁴⁾

所在地(県)	炭田名	炭鉱名	遺産名称	開業年	消滅(放置)	保存・活用	登録					新しく建設	
							重要文化財	登録有形文化財	史跡名勝天然記念物	世界遺産	近代化産業遺産		
福岡県	三池炭田	三井三池炭鉱	三井三池炭鉱跡			○				○2015.7.8			
			宮浦石炭記念公園			○						○	
			大牟田市石炭産業科学館	1995年		○							○
			宮原坑跡			○			○2000.01.19	○2015.7.8			
			三池炭鉱宮原坑施設(第二堅坑巻揚機室、第二堅坑櫓)	1901年建設		○	○1998.05.01			○2015.7.8	○		
			三井三池炭鉱立坑第二堅坑櫓基礎	1895年	○						○		
			三池式快速石炭船積機3号機	1911年	○						○		
			三井三池製作所鍛冶工場外壁	1895年	○						○		
			旧三井三池炭鉱宮浦坑大斜坑	1923年	○						○		
			三池炭鉱専用鉄道敷設			○			○2000.01.19	○2015.7.8			
			三池炭鉱専用鉄道電気機関車18号	1937年		○					○		
			三池港	1908年		○					○		
			三川坑跡	1940年		○					○		
			旧三井港倶楽部	1908年開館		○			○		○		
			旧長崎税関三池税関支署			○			○2000.01.19	○2015.7.8			
			旧三池炭鉱三川電鉄変電所	1909年建設		○			○2000.12.04				
			旧三池炭鉱宮浦坑煙突	1888年建設		○			○1998.01.16			○	
			熊本県			万田坑跡			○			○2000.01.19	○2015.7.8
三池炭鉱旧万田坑施設(第二堅坑巻揚機室、第二堅坑櫓)	1909年建設					○	○1998.05.01		○2015.7.8				
三池炭鉱旧万田坑施設(倉庫及びポンプ室、安全燈室及び浴室)	1905年建設					○	○1998.05.01		○2015.7.8				
三池炭鉱旧万田坑施設(事務所)	1912-1926年建設					○	○1998.05.01		○2015.7.8				
三池炭鉱旧万田坑施設(山ノ神祭祀施設)	1916-1918年建設					○	○1998.05.01						
三角旧港(三角西港)施設 後方水路	1887年建設					○	○2012.07.09		○2015.7.8				
三角旧港(三角西港)施設(埠頭、中之橋、三之橋、二之橋、一之橋、西端排水路、西排水路、東排水路)	1887年建設					○	○2002.12.26		○2015.7.8				
三角浦の文化的景観						○	○2015.01.26		○2015.7.8				

また、この時期に、北海道芦別市では芦別レジャーランド(1970年)が開業し、福島県ではハワイアンセンター(1966年)や、いわき市総合福祉センター(1972年)が開業、山口県では石炭記念館(1969年)が開館したことが分かる。福岡県直方市では直方石炭記念館(1971年)が開館し、長崎県では池島火力発電所(1967年)が設置された。(図3)

これより、この時代は多くの地域で採炭停止、閉山ラッシュが起き、炭鉱の時代を後世に伝えて行くため炭鉱記念館を建設したり、炭鉱に代わる新しい産業に挑戦したりする地域も現れる。炭鉱が終了し、炭鉱の次の産業として、新しく建設される施設も増えてきた。

3.4 炭鉱遺産の登録、保存の割合

表4表5は表2表3を基に遺産を4つに分類し分析したものである。遺産の登録・非登録の数を横軸に、保存・活用・非活用の数を縦軸にして、その割合も示した。

山口県は、非登録かつ非活用が42.11%と1番多いが、登録かつ保存活用も36.84%と高い割合を占めている。また、遺産の合計が19と少ないことが分かる。登録されていない遺産の多くは近代化していく中で取り壊されたと考えられる。

一方で、三池は、保存・活用の割合が76.0%、登録されているものが92.0%と、高い割合を占めている。

3.5 三池炭田の炭鉱遺産の活用例

三池でどのように遺産が活用されているのかについて、特に代表的な万田坑と宮原坑の活用のされ方について調べた。万田坑では、炭鉱跡地の見学以外に、万田坑フェスタや、万田坑まるしえ、万田坑クリーンアップ大作戦などのイベントが多く行われている⁵⁾。宮原坑では、宮原坑フェスタや、耐震工事特別公開などのイベントが行われている⁶⁾。炭鉱跡地を活用し様々なイベントが開かれ、市民や観光客が集まり、そこが憩いの場となっていることが分かった。

4 山口県の課題

4.1 山口県の炭鉱遺産の現況

山口県の遺産の中で、宇部市渡辺翁記念館が重要文化財に登録され、桃山配水池量水室、旧桃山一号配水池監

表4 山口の活用状況

山口	保存・活用	非活用	合計
登録	7 36.84%	1 5.26%	8 42.11%
非登録	3 15.79%	8 42.11%	11 57.89%
合計	10	9	19

表5 三池炭田の活用状況

三池	保存・活用	非活用	合計
登録	19 76.00%	4 16.00%	23 92.00%
非登録	2 8.00%	0 0.00%	2 8.00%
合計	21	4	25

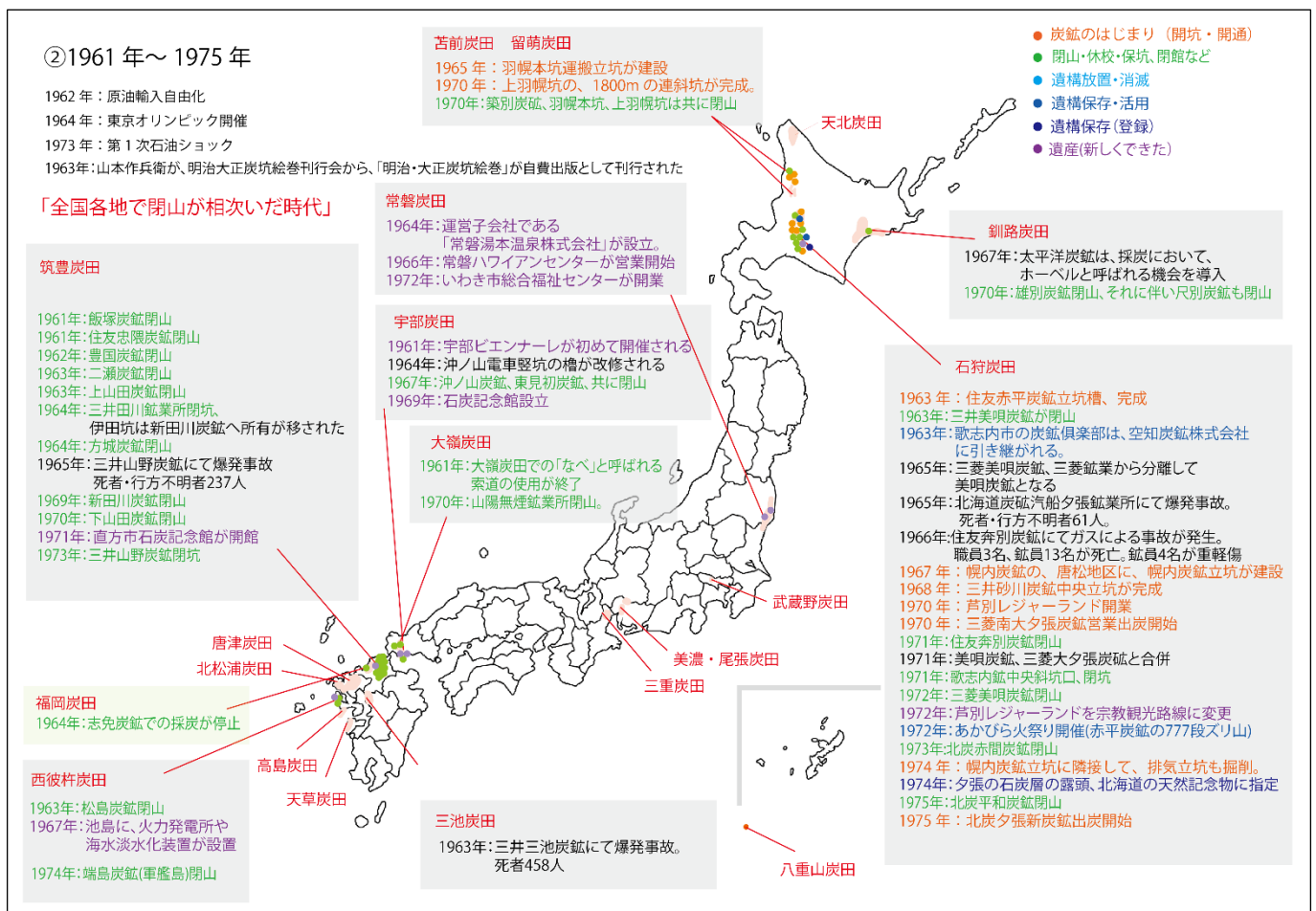


図3 1961年～1975年:エネルギー革命が起きる期の日本の炭鉱の状況(全体の変遷の中抜粋)

視廊入口、沖ノ山電車堅坑石垣、本山鉱坑口跡が登録有形文化財に登録されている。また石炭記念館、宇部市渡辺翁記念館、日本国有鉄道D51-18号蒸気機関車、桃山配水池量水室、旧桃山一号配水池監視廊入口、長生炭鉱通気堅坑跡が近代化産業遺産に登録されている⁴⁾。

宇部市渡辺翁記念館では、コンサートやイベントが開かれ、宇部の芸術文化の拠点となる一方で、建物は老朽化に伴う改修工事を何度もし、適切な維持・管理が行われている⁷⁾。

宇部市石炭記念館には、石炭産業の貴重な文献や機材などが展示され、石炭まつりなどのイベントも開かれている。記念館の象徴である展望台は、東見初炭鉱の堅坑櫓を移設し、活用したものである。また、平成のはじめに大規模リニューアルが行われ、屋外展示場に置かれている人車を修復するなど炭鉱の歴史を伝承しているが、建物の老朽化が進み、改修が必要となっている。改修のための検討が行われている状況である⁷⁾⁸⁾。

沖ノ山電車堅坑石垣は、堅坑櫓の基礎であるとともに、坑口を保護するものとして建造された。石垣は大正14年建造当時の原型を忠実に残したものである。しかし、一般公開はしておらず、UBE社の敷地内にあるため、見学の際にはUBE社に問い合わせる必要がある⁷⁾。

長生炭鉱通気堅坑跡は、近代化産業遺産に登録されているが、建設されてから100年ほど経ち、現在は、老朽化により壁面の亀裂やコンクリートの破損が見られる。「長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会」が、長生炭鉱通気堅坑跡の保存、指定文化財の登録に向けて活動している⁹⁾。

大嶺炭田の炭鉱跡地は現在、サンド工場の敷地となっており、美祿斜坑口や排水をろ過する設備、シクナー、原炭ポケットなどが残されている。山手には、ボタ山などが残されている¹⁾が、それらは放置されている。

4.2 他の地域との比較

図4は山口の炭鉱の活動時期と、その後の使われ方について、1つのグラフにまとめたものである。

炭鉱ごとに、稼働していた時期を水色、閉山後、炭鉱遺産が保存・活用されている炭鉱をオレンジ、閉山後炭

鉱遺産が放置されている炭鉱を緑とした。また、遺産が登録されている炭鉱は斜線で示した。遺産が保存・活用されている炭鉱と、放置されている炭鉱の判断は、3章で示した表の中で、消滅・放置の数と、保存・活用の数を比べ、多い方を採用した。同数の炭鉱は、保存・活用とすることにした。途中で消えているグラフは不明でさらなる調査が必要である。他の地域も同じようにまとめ、比較した。

5 まとめ

山口県は、1970年頃には全ての炭鉱が閉山し、工業に移行したが、その際ほとんどの炭鉱遺産が撤去された。そのため、登録・保存されている遺産の割合は高いが、数が少ない。また、登録・保存されていても上手く活用できていないように見られる。3章で述べた三池の万田坑、宮原坑、のように、山口のまだ残されている炭鉱遺産をもっと活用し、市民が親しみをもって触れ合える場所にする余地がある。

参考文献

- 1) 大野達也(編)：炭鉱遺産をゆく、イカロス出版株式会社、2021
- 2) 上原正文：石炭採掘技術、(財)石炭エネルギーセンター、2011
- 3) 文化庁：国指定文化財等データベース、<https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/searchlist>、(2022.12.23 閲覧)
- 4) 庵田綾宇：産業考古学研究室、<http://kourokan.main.jp/index.html>、(2022.12.23 閲覧)
- 5) 一般財団法人荒尾市観光協会：まるごとあらお、<https://arao-kankou.jp/>、(2022.12.23 閲覧)
- 6) 大牟田市企画総務部世界遺産・文化財室：大牟田市の近代化産業遺産、<https://www.miike-coalmines.jp/whatsnew.php?no=69>、(2022.12.23 閲覧)
- 7) 宇部市：宇部市公式ウェブサイト、<https://www.city.ube.yamaguchi.jp/>、(2022.12.23 閲覧)
- 8) ときわ公園：<https://www.tokiwapark.jp/sekitan/>、(2022.12.23 閲覧)
- 9) 長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会：<https://www.chouseitankou.com/>、(2022.12.23 閲覧)
- 10) 炭鉱写真集編集委員会(編)：炭鉱—戦後50年のあゆみ—、宇部市、1995年

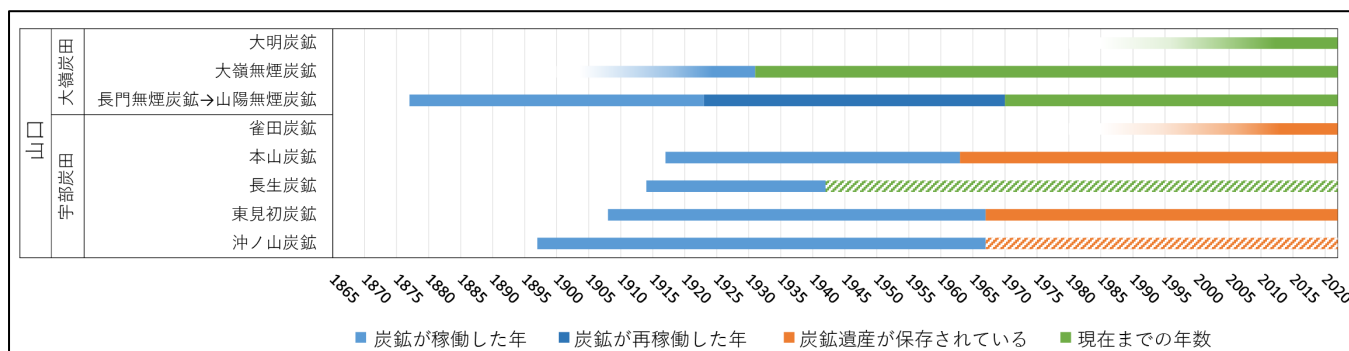


図4 山口県のまとめ

*1 山口大学工学部 感性デザイン工学科 学部生
 *2 山口大学大学院創成科学研究科 教授・博士(工学)
 *3 山口大学大学院創成科学研究科 准教授 博士(環境学)

*1 Department of Sensory Design Engineering, Faculty of Engineering, Yamaguchi Univ
 *2 Prof. Graduate School of Sciences and Technology for Innovation, Yamaguchi Univ., Ph.D.
 *3 Associate Prof. Graduate School of Sciences and Technology for Innovation, Yamaguchi Univ., Ph.D